

Κατά καρδίας 「心に対して」 — ある前置詞句の定型表現化 — *

橘 孝司

1. 問題点の提示

中世後期の民衆ギリシャ語テキスト(12世紀-15世紀)には複合前置詞の例が多く見られるが、これを構成する副詞・前置詞の形態は多様性に富んでいる。例えば、(1-2)においては副詞 μέσα, έσω が前置詞句 κατά καρδίας と並んで現れている。

(1) δοξεύει την αγέρωχον **κατά καρδίας μέσα**. Λιβ.Ν. 1198

「心の中に対してその傲慢を射る」

(2) και βλέπει βέλος κάθεται **έσω κατά καρδίας** Βελθ. 409

「心の中に矢が立っているのが見える」

ところが、現代ギリシャ語になると μέσα は標準語の形態として頻用されるようになるのに対して、έσω は口語には現れなくなる。また、前置詞 κατά も以前の時期に比べるとその使用領域は随分と限定されている。つまり、現代ギリシャ語の観点からは、(1-2) は複合前置詞の例とは見なし難く、定型化した表現であるような印象を受ける。しかしながら、これは現代語の文法に基づいた予測に過ぎず、中世後期において本当に複合前置詞ではなかったのかどうかという点は、慎重に判断する必要がある。その時期にはいまだ定型表現にはなっていなかったかも知れないからである¹⁾。

本稿では、κατά καρδίας μέσα, έσω κατά καρδίας の意味統語構造をめぐるこの問題を、以下のように二つの点に分けて考察することにする。

問題点Ⅰ: κατά καρδίας μέσα, έσω κατά καρδίας は中世後期において複合前置詞と考えることが可能であるのか? (共時的側面)

問題点Ⅱ: この二つの例が複合前置詞ではなく、定型表現 κατά καρδίας に副詞 μέσω, έσω が並置されたものに過ぎないとすると、前置詞 κατά と名詞 καρδία はいかにして定型表現を構成するに至ったのか? ²⁾ (通時的側面)

2. 中世民衆ギリシャ語の κατά καρδίας

問題点Iに取りかかるに先立って、副詞＋前置詞句が複合前置詞句を構成するとはどういうことなのか、という定義に関わる前提を検討しておきたい。このことが暗に含んでいるのは、複合前置詞として生産的である、ということである。この生産性という点を、例えば複合前置詞を含む次のような例で考えてみよう。

(3) Πέντε ημέρες είχαν μέρσα εἰς τα καράβια Φλώρ. 1274

「彼らは五日間を船の中で過ごした」

(4) ὑπὸν καὶ ἀποσώνουσιν μέρσα εἰς τὸ παλάτιν. Ἰμπ. 860

「彼らは行き、宮殿の中に達する」

ここでの複合前置詞 μέρσα εἰς は、高い頻度でテキスト中に繰り返し現れる。そのような生産性の高さを保証している一因として、まず、この複合前置詞の意味（「内部への接近・存在」）と矛盾しないならば、καράβιν「船」、παλάτιν「宮殿」以外に様々な名詞句が後続し得るし³⁾、同じ名詞句でも定・不定冠詞の介在や修飾語句の挿入によって自由に拡張出来る、ということがある。また、別の要因として、これも複合前置詞の意味と矛盾しない範囲で、どのような述語とも共起し得る、という点が挙げられる⁴⁾。

これらの点から (1-2) を見た場合、そこに含まれる μέρσα / ἔσω κατά καρδίας は生産的な複合前置詞の例とは考え難い。むしろ、前置詞＋名詞 κατά καρδίας が一種の定型表現化したものに副詞 μέρσα / ἔσω が並置されているに過ぎない、と考えた方がよいと思われる⁵⁾。以下では、次のような順序に従って、この点を論証していく。

- (a) 「内部」副詞＋前置詞 κατά＋名詞の例が非常に少数である点。
- (b) 前置詞 κατά＋名詞の例は多数存在するが、κατά καρδίας という連鎖はほとんど常にこの形で現れ、冠詞・修飾句の介在を許さない点。
- (c) κατά καρδίας の意味領域が限定されている点。
- (d) καρδία は通常他の前置詞に支配される点。

2. 1. 副詞と共起する前置詞 κατά

まず、μέρσα / ἔσω が前置詞 κατά と共起する用例の頻度から考察を始めよう。コーパス中ではそのような例は(1-2)のみであった。このことは、しかしながら、そもそもそのような文脈（「ある対象の内部への接近・内部での存在」）が少ないという理由によるとは考え難い。この種の文脈は実際に観察されるのだが、

そこでは μέσα / έσω が他の前置詞と結合しているのである。具体的には、μέσα εις (5), έσω σε (6-7) が見出される⁶⁾。

(5) Επήγαν και εσέβασάν τον **μέσα εις** το καράβιν. Ιμπ. 726

「彼らは彼を船の中へと連れていった」

(6) **έσω** στον τόπον των Σκορτών κείται και αφεντεύει. Χρ.Μορ.Ρ. 8275

「(城は) スコルタの地の中にあつて、そこを支配している」

(7) ... στο πλοίοιν **έσω** σέβησαν, Απολλών. 644

「彼らは船の中に入った」

μέσα, έσω 以外の「内部」副詞も前置詞 κατά との共起例はない。ここでも、その結合相手となる前置詞は εις / σ(ε)である。例えば, απέσω εις Χρ.Μορ.Η. 8797, εις ... έσωθεν Φλώρ. 1594, έσωθεν ... εις Αχιλ.Ν. 328, εντός ... σ Αχιλ.Ν. 700, ένδον εις Διγ.Γ. ΙΙ266⁷⁾。

以上の考察から、μέσα / έσω が κατά と共起する例の頻度は非常に低く、生産的とはいひ難い、しかしそれはそのような文脈が存在しないからではない、ということが分かる。

2. 2. 前置詞 κατά に支配される名詞

今度は前置詞 κατά がどのように使用されるのか、特にどのような名詞を支配するのかを見てみよう。ΚΡΙΑΡΑΣ の "κατά" の項目によれば、その使用例は少ない⁸⁾。特に属格名詞とともに「～に対して・反して」の意味で用いられることが多い。例えば、

(8) Εξέπνευσε πνέων θυμού **κατά** της Ρωμανίας, Διγ.Γ. Ι49

「彼はロマニアに対して怒りを吐き出した」

のごとくであり、このことは (3.2. で見るように) すでにコイネー期から見られる特徴であつて、現代語においても同様である⁹⁾。

しかしながら、問題なのは κατά καρδίας という連鎖がつねにこの形で出現するという点である。例示すると、

(9) τοξεύει την αγέρωχον, στοχά **κατά** καρδίας. Λιβ.Ρ. 1275¹⁰⁾

(10) δοξεύγει την αγέρωχον, στοχά **κατά** καρδίας. Λιβ.Ε. 1334

「心に対して狙いますとその傲慢を射る」

(11) τοξεύει την αγέρωχον, στοχά **κατά** καρδίας. Λιβ.Υ. 1189

「驕慢を射、心に対して狙いを定める」

(12) Και ευθύς το τόξον έσυρεν **κατά καρδίας** με εδώκεν Λιβ.V. 484

「直ちに弓を引き、私の心に対して一撃を加えた」

(13) δια να με κρού **κατά καρδίας** και την ψυχή να παίρνη. Λιβ.V. 1650

「私の心に対して一撃を加え、魂を奪うために」

(14) **Κατά καρδίας** έκαψεν τον δούκαν τον δεσπότην. Χρον.Τόκκων 3384

「(彼の死は) 君主の心を焼き尽くした」

これらの例では、κατά と καρδίας の間に冠詞・修飾句が介在することがない。また、καρδίας もほとんど常に単数属格形で現れている¹¹⁾。従って、κατά καρδίας は定型表現化している可能性が高い。このことを裏付けるもう一つの証拠は、使用される意味領域が限定されているように思われることである。つまり、(14)を除いて、いずれも「打撃」に関わる動詞 τοξεύω「射る(9)」、δοξεύω「射る(10)」、στοχώ「狙う(11)」、δίδω「打つ(12)」、κρούω「打つ(13)」とともに用いられて、「打撃をうける身体部位」を指している¹²⁾。この点を、次節で詳細に検討してみることにする。

2. 3. 「打撃を受ける身体部位」の表現

中世民衆ギリシャ語で「打撃」の表現はどのようになされるのかをこの節では検討しよう。確かに「打撃を受ける部位」は κατά でも表される。「心」以外の例として(15-16)。(【 】内は打撃動詞)

(15) κρούει τον **κατά κεφαλής** πλήρης εις την μεσίαν Διγ.G. IV185

「彼の頭に対して、その真ん中を打つ」【κρούω】

(16) τη ράβδω **κατά κεφαλής** τούτον εγώ πατάσσω, Διγ.G. VI224

「私は彼の頭に対して杖で一撃を加える」【πατάσσω】

しかし、これらは少数派であり、通常は他の副詞・前置詞、とりわけ απένω / απάνω εις が用いられる。

(17) και ευθύς **εις** την καρδίαν της ετόξευσεν **απέσω** Αχιλ.N. 1014

「直ちに彼女の心の中へと矢を放った」【τοξεύω】

(18) και δόξεψεν και δώκεν την **εις** την καρδίαν **απέσω** Αχιλ.L. 712

「矢を射、彼女の心の中を打った」【δίδω】¹³⁾

(19) σύρνει σπαθί και κρούει τον **απάνω** στο κασσίδι Βυζ.Ιλιαδ. 942

「剣を抜き、彼の兜の上を打つ」【κρούω】

(20) στο στήθος τον εβάρεσεν **απάνω εις** το σκουτάριον, Χρ.Μορ.H. 4022

「盾の上、彼の胸元を打った」【βαρύνω】¹⁴⁾

より単純には、副詞をとらず、前置詞 *εις* のみでも表現可能である¹⁵⁾。

(21) καλὴν ραβδὲαν ἔδωκα τὴν φάραν ᾧς τὸ κεφάλιν Διγ.Ε. 1276

「馬の頭に見事な一撃を加えた」【δίδω】

(22) Καὶ ἅμα τὸ ἐμπεῖ, μετὰ τὸ πτερόν δέρνει με *εις* τὸ κεφάλιν, Λιβ.Ν. 710

「入ると同時に羽で私の頭を打つ」【δέρνω】

(23) πατάξας δὲ *εις* κεφαλὴν, ἔθανε παραχρήμα. Διγ.Γ. VI97

「(私が獅子の)頭を打つと、直ちに死んだ」【πατάσσω】¹⁶⁾

すなわち、κατὰ καρδίαςは「打撃をうける部位」の文脈で主に使用されるけれども、同じ意味領域において他の表現 ἀπέσω / ἀπάνω *εις* と対立しており、これに比べるならばむしろ少数派である、ということになる。

2. 4. καρδία を支配する前置詞

最後に名詞 καρδία が通常どのような前置詞と結合し得るか、という点を検討しておきたい。このことにより、κατὰ καρδίας の連鎖が定型表現であることがより明らかになると思われる。

ΚΡΙΑΡΑΣ, "καρδία" の項目には、この名詞を支配する前置詞として ἀπό, ἐκ, μετὰ, με, *εις* / σε, ἐν, ἐπὶ (= ἐπί), πρὸς が挙げられている。このうち、「心に向かう心理的・物理的移動」という意味概念を含み κατὰ と競合するのは *εις* / σε (ないし πρὸς) であろう。このような *εις* / σε に支配される καρδία の例は多い。我々のコーパスから例を挙げておこう。

(24) καθάπερ φλόξ *εις* τὴν ἐμὴν καρδίαν ἐπείσθηεν Διγ.Γ. V232

「我が心に炎が入ったごとく」

(25) Ἐρως *εις* τὴν καρδίαν μου ἐσέβηκεν τῆς κόρης, Λιβ.Ν. 2340

「乙女の恋が私の心に入った」

(26) καρφί τοι εἶχεν *εις* τὴν καρδίαν ὥστε νὰ τὰ ἐπάρῃ. Χρον.Τόκκων 2275¹⁷⁾

「それを棘として心に持っており、奪おうと」

さらに、καρδία を含む前置詞句に副詞が先行して複合前置詞を構成する例もあるが、2.1. で見た場合と同じく、前置詞は *εις* である。

(27) ὅτι τὰ εἶχασιν καρφὶν μέσα *εις* τὴν καρδίαν τοὺς. Χρον.Τόκκων 2101¹⁸⁾

「彼らはその地を心中の刺のように感じていたから」

このように、「心に向かう心的・物的動き」や「心における存在」という意味概念は通常 *εις* / σε καρδία(ν) で表される。その生産性の高さという点はまた、(24-27) において、定冠詞や所有代名詞 ἐμὴν, μου, τοὺς によって名詞が拡張され

ている点にも現れている。

以上の四つの視点からの考察をここでもう一度まとめてみよう。

(a) κατά が副詞と共に起するのは稀。

(b) κατά καρδίας はつねにこの連鎖で現れ、冠詞・修飾語が介在しない。

(c) κατά καρδίας の使用は「打撃」の文脈に限定されるが、この意味領域では少数派。(通常は ἀπάνω / ἀπένω) εἰς により表現される)。

(d) καρδία は「心に向かう移動」を示す場合は通常 εἰς に支配される。

これらの諸点が確認された以上、(1-2)に見られる μέσα / έσω κατά καρδίας は複合前置詞ではなく、定型表現 κατά καρδίας に副詞が並置されたものと解釈する方が妥当であると思われる。

3. κατά καρδίας の通時的伝承

次に問題点 II に移る。前置詞 κατά と名詞 καρδία はともに独立した語彙として古代から現代にわたって使用され続けるけれども、いかにして両者の定型表現化が生じたのだろうか。

3. 1. 古代から中世へ

まず、古代のテキストにおける κατά καρδίας の用例調査から始めよう。注目すべきことに κατά καρδίας は紀元前のテキストには例証されない。紀元後の文献ではヘロディアノス (AD ii-iii)、リバニオス (AD iv)、エピファニオス (AD iv)、ヨハネス・クリュソストモス (AD iv-v)、「キリストの受難」(AD xii?)、ニケフォロス・グレゴラス (AD xiii - xiv)、イリアス古註などに見られるが、いずれも「打撃を与える・受ける」という文脈に現れる¹⁹⁾。

次に、冠詞つきの κατά τῆς καρδίας を調べてみると、これも古典期ではアリストパネス (v-iv BC) の一例 (*Pax* 525) くらいしか見当たらない。紀元後の文献ではフラヴィウス・ヨセフス (AD i)、アキレウス・タティオス (AD ii)、エウセビオス (AD iv)、リバニオス (AD iv)、ニュッサのグレゴリオス (AD iv)、ソゾメノス (AD v)、続ゲオルギオス・モナコス (AD x)、ニケフォロス・グレゴラス (AD xiii-xiv) 等に現れる。ここでもほとんどの例が「打撃」の文脈において使用されているが、唯一の紀元前のテキストであるアリストパネスではそれとは異なる文脈で使われている²⁰⁾。時代的には、アリストパネスはもちろん、ヨセフスやアキレウス・タティオスの用例は冠詞なしの κατά καρδίας の初出例に先行する。

3. 2. 「打撃を受ける部位」の表現

「打撃」の文脈中での κατά (τῆς) καρδίας の用例が、紀元後に現れ始めるのは偶然であろうか。別の言い方をすれば、それ以前にこのような用法が見出されないのは、資料の欠如によるものなのだろうか。この点を明らかにするためには、紀元前において「打撃」の表現がどのようになされていたのかを検討する必要がある。

このテーマについては既に Κόντος (1892) が広範囲に調査している。それによると、「打撃を受ける部位」はホメロス・古典期において前置詞なしの対格形や前置詞 εἰς, πρὸς, κατά 等で表現される²¹⁾。つまり「打撃」の文脈での κατά はホメロスにも現れる。しかしながら、これらは属格形ではなく対格形を支配している (κατὰ κεφαλῇν, κατὰ στήθος)²²⁾。この対格形は、対象への方向性ないし対象全体の広がりを示す対格形に由来すると考えられている²³⁾。

このように「打撃を受ける部位」の表現は紀元前のテキストにも見られるが、κατά + 属格形とは異なる表現が用いられる。κατά + 属格形の例はガレノス (AD ii)、アキレウス・タティオス (AD ii)、ヘロディアノス (AD ii - iii) に見られ、これらは 3.1. で触れた κατὰ καρδίας の場合同様、紀元後のことになる²⁴⁾。

κατά + 属格形が「打撃」表現に用いられるようになる背景としては、その意味機能の狭まりということがあり、これは既に紀元前に観察される。例えば、Mayser (1934:427ff.) によれば、プトレマイオス朝パピルス文書では κατά + 属格形は古典期に較べ減少し、「～下方へ」("von - herab") の意味を完全に消失する一方で、「～に敵対して」("gegen") の意に限定されるようになる²⁵⁾。代表的な例として、ἐπιπεσὼν ἔτυπεν αὐτὸν κατὰ τοῦ τραχήλου 「襲いかかって項を打った」(AD 246) が挙げられている (p. 428)。

ビザンツ期以降に関しては、Jannaris (1897:385) が κατά の記述をする中でこの意味の狭まりに一節を割き、ヨハネス・マララス (AD v - vi)、「復活祭年代記」(AD vii)、テオフアネス (AD viii-ix)、続テオフアネス (AD x) の例を掲げて、κατά + 属格形が「打撃」に頻用されるのはローマ期以降 (150 BC - AD 300) である、と述べている²⁶⁾。

以上の推移をまとめると次のようになる。

- (1) ホメロス・古典期には「打撃を受ける身体部位」は前置詞なしの対格形、εἰς + 対格形、κατά + 対格形などで表現される。
- (2) ローマ期以降 κατά + 属格形が「敵対」("against") の意味に限定されるにつれ、「打撃を受ける身体部位」はこのパターンで表現されるようになる。

(3) κατὰ τῆς καρδίας はアリストパネスの一例を除くと、紀元 1 世紀頃から現れ始める。κατὰ καρδίας の方は紀元 3 世紀頃から現れる。

こういった表現形式の推移の中で「打撃」の文脈での κατὰ καρδίας の定型表現化が生じたと思われる。他方で、中世後期以降、「打撃を受ける部位」表現の主流が (ἀπέσω / ἀπάνω) εἰς / σε + 対格形であるのは 2.3. で見た通りである。

3. 3. 中世から現代へ

紀元後から中世後期にかけて頻用されるようになり、定型表現化した κατὰ καρδίας であるが、現代標準語には伝わっていないようである。現代では、これに代わって κατάκαρδα 「心に対して」なる副詞が使用される²⁷⁾。この語は本稿のコーパスには見られず、12 世紀から 1669 年までを対象とする ΚΡΙΑΡΑΣ にも掲載されていない。しかし、1719 年刊のアレッシオ・ダ・ソマヴェラのギリシヤ語イタリア語辞典や 1874 年刊のスカラトス・ピザンディオスの現代口語辞典には引用されているので²⁸⁾、18 世紀の初めには広まっていたようである。

この κατάκαρδα と κατὰ καρδίας の関係を考えると、κατάκαρδα < κατὰ καρδίας という音韻変化が考え難い以上、副詞語尾-α が類推により拡張したものと思われる²⁹⁾。その際、類推のモデルとして役立ったのは κατακέφαλα 等の様態の副詞であろう³⁰⁾。上述のように κατὰ + 属格形が「敵対」("against") の意味に限定されるようになって以降、「打撃」の文脈で κατὰ κεφαλῆς のような例が頻用されるようになる(註 26 参照)。しかし他方で、副詞 κατακέφαλα も同じような文脈に現れ、しかもその出現時期は κατάκαρδα よりもはるか以前に遡る。ただし、κατακέφαλα には「頭を下にして (i)」と「頭の上に・へ (ii)」の二義があるのだが³¹⁾、(i) は、紀元 1 世紀頃の例が見られるのに対し³²⁾、(ii) の用例は、5-6 世紀のパピルスに現れる³³⁾。後者の意味発展の段階において初めて κατὰ κεφαλῆς : κατακέφαλα = κατὰ καρδίας : x の比例式を想定することが出来、これに基づいて、κατάκαρδα の成立が可能になると考えられよう³⁴⁾。

かくして、紀元 3 世紀頃から例証され、中世後期に定型表現化が確認される κατὰ καρδίας は、その後、単一の語彙形態 κατάκαρδα として現代語に伝えられたのである。

註

* 本稿作成に当たって「ディゲニス・アクリティス」「リビストロスとロダムネ」のコンコーダンスの使用を快く許可して下さった Roderick Beaton 教授 (King's

College London) に心より感謝いたします。

本稿で使用する中世民衆語コーパスについては Tachibana (1995) 参照。テキストの略号は KPIAPAS に従う【τομ. IB´, σσ. μβ´-νβ´参照】。それ以外の文献（古代～ビザンツ期）の引用形式は Berkowitz & Squitier (1990) に従う。なお、作家名の後に付されたローマ数字は世紀を示す（例えば AD iii＝紀元 3 世紀）。

- 1) 例えば Lambert (1935: 411) は (1) をむしろ Prépositions adverbiales に分類する。
- 2) 定型表現については註 5 参照。

3) γονικά「祖国」Διγ.Ε. 1064, φλόγα「炎」Φλωρ. 1521, καλάθια「籠」ib.1585, πύργον「塔」ib. 1713, φόρον「広場」ib. 1737, 1738, βαρέλια「樽」Ιμπ. 818, Προβέντζαν「プロバンス地方」ib. 586, 666, κελλίν「独居房」ib. 700, άλογον「木馬」Βυζ.Ιλιαδ. 997, 999 など。

4) 「内部への接近」として βάνει Ιμπ. 648「置く」, εφέραν Βελ.Ν. 429「連れてきた」, έφθασεν Ιμπ. 666「達した」, ήλθαν Ιμπ. 603「来た」, ήμπασιν Αχιλ.Λ. 183, 1071「入った」, πέσης Βελθ. 638「落ちる」, υπάγουν Ιμπ. 731「連れていく」など。「内部での存在（内部での活動も含む）」として εγίνετον Φλώρ. 1738「行われた」, είχα Ιμπ. 818「持っていた」, εκάθετον Φλώρ. V. 1621「座っていた」, εποίκην Ιμπ. 744「過ごした」, κάθεται Βελ.Ν. 506「座っている」, κοίτεται Χρ.Μορ.Η. 1526, 8275「位置する」, στέκονται Βυζ.Ιλιαδ. 298「立っている」など。

5) Lyons (1977:536) は複合語が固定していく過程を論じるに際し、定型表現を指すのに petrification という語を使用している。「統語的複合語 (syntactic compounds) が語彙素として慣習化される過程は petrification という適切な呼び名も持っている。この比喩的用語には問題の過程において区別され得る二つの局面、固定化 (solidification) と縮小 (shrinkage) を示そうという意図がある... (ある表現が) 頻繁に使用されるほど、定まった表現として固定化されやすく、話者はそれを毎回新たに生産するというよりも、記憶の中に蓄えるであろう... 固定化は petrification の次の局面である縮小すなわち意味的特殊化へとつながる」。この用語は Leech (1974) から取られているようであるが、そこでは意味的変容の局面に重点がおかれ、「慣習化された語彙の意味が語彙規則によって指定される『理論上』の意味から逸れる過程の全体は petrification と名付けられ得る」(Leech, 1981²: 226)とされている。この種の定型表現をイディオムと呼んでもいいのであるが、本稿で扱う κατά καρδίας は通常イディオムという語から想像されるほどには意味の変容を蒙っていない。しかし他方では Lyons のい

う「固定化」solidificationの局面にのみとどまらず、2.2.-2.3.で見るように使用される意味領域がかなり限定されている。そこで、本稿では κατά καρδίας を単に「定型表現」と呼び、欧文術語としては petrification を考えるものとする。

本稿のコーパスの大部分は韻文（十五音節詩）であるが、同一ないし類似した語句の繰り返しが多い点をよく知られている。韻文に使用されるそのような既製の定型語句を指すのには formula という語が一般に用いられている。民衆ギリシャ語詩における formula の問題を本格的に論じた Jeffreys (1973:175) の作業定義の中では、定型語句の曲用・活用、単音節の前置詞・接続詞の交替、人称代名詞の交替、語の省略（韻律に抵触しない範囲で）などのパリエーションは許されるが、基本的な長さとして、少なくとも半行（8ないし7音節）が一致（ないし類似）する必要がある、とされている。したがって、本稿が論じるような、それ以下の音節の前置詞句は、詩の半行を形成するのにいくら貢献しているとはいえ、formula には含まれない。

- 6) μέσα εις の類例については註3,4 参照。έσω εις /σε を含む他の例として Έσω εις κοφίνια βάλλουσι τα ρόδα των ανθέων, Φλώρ. 1592 「籠の中へ薔薇の花を投げ込む」、έσω εις την φλόγαν ρίπτονται υπό των υπηρέτων· Φλώρ. 1767 「従僕たちによって炎の中に投げ込まれる」など。

また、本文に掲げたのは「内部への接近」「内部での存在」の場合であるが、「内部からの分離」の場合は μέσα από, μέσα εκ が使われる。例えば και δράκος μάς ελάλησεν μέσ' από το καλάμιν Διγ.Ε. 1741 「そして龍は葦の茂みの中から私たちに話しかけた」、Εξέβην ο Ιμπέριος μέσα εκ το καράβιν Ιμπ. 652 「インペリオスは船の中から出てきた」。

- 7) 「内部」以外の空間副詞とも κατά は共起し難い。稀な例としては και στρώμαν κάτω κατά γης να θέσωμεν εκείσε. Καλ. 2410 「その下の地面に床を敷くように」、κ' εβάσταξεν <τα> άρματα απάνω κατ 'εκείνου, Χρον.Μορ.Ρ. 3344 「彼に対してその上に武器を担った」、εκάθισεν .../αντίκρυς κατά πρόσωπα απάνωθεν των όλων Απολλών. 174-5 「全ての人の上座に對面して座った」
- 8) ΚΡΙΑΡΑΣ の分類は次の如し：1) εναντίον 「～に対して」、2) απέναντι, αντίκρυ 「～に対して」、3) (κάπου) κοντά (σε κ.) 「(どこか) ～の近くに」、4) ως προς, σε σχέση με 「～に関して」、5) διαμέσου 「～を通じて」、6) κατά τη διάρκεια 「～の間」、7α) σύμφωνα με, ανάλογα με 「～に応じて」、7β) όπως 「～のように」、7γ) όμοια με 「～に似て」。Egea (1988:101) は κατά + 対格形の意味 ("según" 「～に従って」) にのみ触れているが、Apostolopoulos (1984:183) は κατά + 属格形の

意味を"lieu, hostilité, manière" とし、"hostilité" の例として καθ' ἡμῶν ὁρμήσει; Καλ. 1277 「我々に対して攻撃を加えるだろうか」を引用する。

9) 現代語 κατά+属格形「～に対して・反して」については Mirambel (1983 : 186), Hesse (1986) 等参照。

10) 「リビストロスとロダムネ」の平行例 (9-11) は古代語式アクセント表記では次のようになる。

(9) τοξεύει τὴν ἀγέρωχον, στοχὰ κατὰ καρδίας. Λιβ.Ρ.1275

(10) δοξεύγει τὴν ἀγέρωχον, στοχὰ κατὰ καρδίας. Λιβ.Ε.1334

(11) τοξεύει τὴν ἀγέρωχον, στοχᾶ κατὰ καρδίας. Λιβ.Υ.1189

すなわち、P, E 写本の書き手は στοχὰ を (重アクセントの) 副詞として解釈しており、κατὰ καρδίας は動詞 τοξεύει, δοξεύγει に支配されていることになる。

P 写本の最初の校訂者である Μαυροφρύδης (1866 : 528) もこの例を副詞と見ている ("στοχὰ (επιρρ.) ευστόχως")。これに対し、V 写本のみは στοχᾶ を曲アクセントを持つ母音融合動詞 (verbum contractum) として表記しているので、κατὰ καρδίας はこの動詞に直接支配されることになる。この動詞は同じ写本中にもう一例見られる (Στοχῶ τὸ ὀμπροστοκούρβιν του, κρούγω τὸν κονταρέα Λιβ.Υ. 2136 「私は彼の鞍の前部に狙いを定め、槍で打つ」)。

11) 名詞の格形の例外としては τοξεύει τὴν ἀγέρωχον στοχὰ κατὰ καρδίαν. Λιβ.Σ. 211 ((9-10)と同義)。ここでは単数対格形が現れている。

12) κατὰ と καρδίας の共起例が、最初に文献に現れる段階からそうであったわけではない。3.1.で見えるように κατὰ τῆς καρδίας の初出例 (アリストパネス) は「打撃」表現以外の文脈に現れる (註 20 参照)。

13) δίδω の他の例 : ἔδωκα ἀπάνω εἰς τὸ κεφάλιν. Διγ.Ε. 1558 「頭の上を打った」
ἔδωκα τὴν λέαιναν ἀπάνω εἰς τὸ κεφάλιν, Διγ.Ε. 1727 「雌獅子の頭の上を打った」。

14) βαρύνω = χτυπῶ (ΚΡΙΑΡΑΣ, "βαρύνω" 参照。類例としては στο στήθος του ἐβάρησε Χρ.Μορ.Ρ. 4022 「彼の胸を打った」)。

15) 打撃動詞が前置詞を介さずに対格名詞 καρδίαν を支配する場合もある。

ἐδόξευσεν τὴν καρδίαν μου καὶ ἐχάθην ἐμπροσθέν μου. Λιβ.Ν. 1206 「私の心を射ると、姿を消した」、ευστόχως πέμπει τὰς βολὰς καὶ τοξεύει καρδίας Διγ.Γ. III4 「まっすぐに狙って矢を放ち、心を射る」。

16) δίδω を含む他の例を ΚΡΙΑΡΑΣ から引用しておく。ο Αλαμάνος ἔδωκεν τὸν Ἰμπέριον εἰς τὸ στήθος Ἰμπ. 416, Διανυκτοῦ τὸν ἔδωκεν πόνος εἰς τὰ νεφρά-ν του Χρον.Τόκκων 1532, μὴ νὰ μου δώσης στὴν κοιλιά καὶ τ' ἀντερά-μου χύσης Φορτοῦν.

(Vinc.) Δ'180.

17) 類例: ωσάν καρφί **εις** την καρδίαν ταίειχεν Χρον.Τόκκων 2679 「その地を心
中の棘のように感じて」。

18) 類例: αμή τον Κάρουλον αυτόν τον είχεν ο δεσπότης, ομοίως και η βασίλισσα,
μέσα εις την καρδίαν τους. Χρον.Τόκκων 3478 「しかし君主も奥方もかのカルロ
スを心の中に抱いていた」。

19) Herodianus *Ab excessu divi Marci* 1.15.4.2 κατὰ τοῦ μετώπου ἢ **κατὰ καρδίας**
ἔφερε τὴν πληγὴν 「額にあるいは心臓に対して傷をもたらし」【φέρω】, Libanius
Declamation 40.2.22.9 **κατὰ καρδίας** πλήξαντας 「胸を打ち」【πλήσσω】, Eriphanius
Homilia in assumptionem Christi [Sp.] 43.484.8 ξίφος **κατὰ καρδίας** δεξάμενος
「剣を胸に受け」【δέχομαι】, Joannes Chrysostomus *Ad populum Antiochenum* 49.
204.47 **κατὰ καρδίας** ἀπεχθῶς ἔχε 「心に対して憎しみを持って」【ἔχω】, Id.
Expositiones in Psalmos 55.193.50 **Κατὰ καρδίας** οἱ ἐχθροὶ ... 「心に対して敵
は...」 [= *Septuaginta, Psalmi* 44.6.2 ἐν καρδίᾳ τῶν ἐχθρῶν τοῦ βασιλέως の注
釈], *Christus patiens* 1889 δέξη βέλος **κατὰ καρδίας** 「心に矢を受け」【δέχομαι】,
Nikephorus Gregoras 1.78.5 **κατὰ καρδίας** τὴν λύπην ἐδέξατο 「心に悲しみを受
け」【δέχομαι】, Id. 2.653.24 ἐπαγόμενος **κατὰ καρδίας** τοὺς τῆς λύπης ἄνθρακας
「心に悲しみの炭火をもたらし」【ἐπάγομαι】, *Scholia in Iliadem (scholia vetera)*
4.468a.2 ἡ πληγὴ **κατὰ καρδίας** ἢ πνεύμονος ἐνεχθεῖσα 「心臓にないし肺にもた
らされた傷」【φέρομαι】 (【 】内は **κατὰ καρδίας** と共起する動詞。次註以降
の例でも同様)。

20) Aristophanes, *Pax* 525 πνεῖς, ὡς ἡδὺν **κατὰ τῆς καρδίας** 「心に対し何と甘き (息
をする)」, Flavius Josephus *Antiquitates Judaicae* 7.241.2 τὸν Ἀφάλωμον
τοξεύσας **κατὰ τῆς καρδίας** 「アブサロムの心臓をめがけて射ると」【τοξεύω】
[Cf. *Septuaginta, Regnorum ii* 18.12.3 ἐνέπηξεν αὐτὰ ἐν τῇ καρδίᾳ Αβεσσαλωμ],
Achilles Tatius 3.15.4.5 ξίφος βάπτει **κατὰ τῆς καρδίας** 「心臓に対して剣を
染める」【βάπτω】, Eusebius *Commentaria in Psalmos* 23.400.9 Τὰ βέλη γενήσεται
κατὰ τῆς καρδίας τῶν σὼν ἐχθρῶν 「矢が汝の敵の心に達するであろう」
【γίγνομαι】, Ib. 23.400.15 ἀποστελλόμενα **κατὰ τῆς καρδίας** τῶν ἐχθρῶν 「敵
の心に対して放たれ」【ἀποστέλλομαι】, Libanius *Declamation* 32.1.39.3 λίθοις
βάλλεσθαι **κατὰ τῆς κεφαλῆς** ... ξίφει **κατὰ τῆς καρδίας** 「石で頭を打つか、
剣で心臓を打つ」【βάλλομαι】, Gregorius Nyssenus *Orationes viii de beatitudinibus*
44.1288.49 ἀκίδες βελῶν **κατὰ τῆς καρδίας** ἐμπίπτουσι 「矢の切っ先を心臓に

- 打ち込む」【ἐμπίπτω】、Sozomenus, 9.13.7.5 ξιφίδιον **κατὰ τῆς καρδίας** ἤλασε「小刀を心臓に刺した」【ἐλαύνω】、Georgius Monachus Continuatus *Chronicon* (redactio A) 837.20 τὸ ξιφος ἔπηξε **κατὰ τῆς καρδίας** τοῦ βασιλέως「剣を皇帝の心臓に刺した」【πήγνυμι】、Nikephorus Gregoras 3.77.2 δέχεσθαι **κατὰ τῆς καρδίας** πληγὴν「心に傷を受ける」【δέχομαι】。
- 21) Δ518 χερμαδίω γὰρ βλήτο . . . **κνήμην δεξιτερὴν**「大岩で右の膝下を打たれた」(Κόντος, 1892:501), Herodotus 3.78 τοῦτο μὲν Ἀσπαθίνην παίει ἐς τὸν μῆρον「アスパシネスの腿を打つ」(Ib:505)。
- 22) Λ108 τὸν μὲν ὑπὲρ μαζοῖο **κατὰ** στήθος βάλε δουρί,「彼の胸の乳の上を槍で打った」(Κόντος, 1892 : 508)。同様の指摘として Chantraine (1953:114) "On emploie également **κατὰ** pour désigner l'emplacement d'une blessure", Schwyzer (1950: 476) "(nahe) an, bei, in der Gegend von", so an einer Stelle eines Körperteiles, einer Waffe"。
- 23) Kühner (1898 : 433) "bezeichnet ursprünglich den Raum, über den (von oben nach unten) eine Bewegung sich erstreckt", Schwyzer (1950 : 476) "Erstreckung (horizontal), 'durch-hin, über-hin'"。
- 24) Achilles Tatius 8.1 παίει με **κατὰ** τῶν προσώπων μάλα βιαίως「私の顔に対して強い打撃を加える」, Herodianos 7.7.4 ξύλῳ παισθέντα **κατὰ** τοῦ κρανίου「木で兜を打たれて」(Κόντος, 1892:509)。
- 25) **κατὰ** 自体の「敵対」「against」の意味獲得については Hammarström (1925 :151-3)。
- 26) Joannes Malalas 387.13 ἔκρουσεν αὐτῷ . . . σπαθίῳ **κατὰ τῆς κεφαλῆς**「彼の頭を剣で打った」【κρούω】、*Chronicon paschale* 594.19 ἔδωκεν αὐτὸν **κατὰ τῆς ἀκοῆς**「彼の耳を打った」【δίδω】、Theophanes 283.22 δὸς αὐτῷ **κατὰ κρανίου**「彼の兜を打て」【δίδω】、Theophanes continuatus 704.13 ἔδωκεν αὐτῷ **κατὰ κεφαλῆς**「彼の頭を打った」【δίδω】(Jannaris, 1897:385)。
- 27) 用例 : η σφαίρα τον χτύπησε **κατάκαρδα**.「弾が彼のちょうど胸に命中した」(ΚΡΙΑΡΑΣ II)、λυπούμαι **κατάκαρδα**.「心より悲しむ」(Ib.)。
- 28) SOMAVERA "Da banda à banda del cuore", Βυζάντιος (1874) "Μέσσην τὴν καρδίαν (τὴν ψυχὴν), καιρίως, κατὰ καρδίας (Ἡρωδ.) Vivement. (筆者による) 下線部分では、κατάκαρδαの説明として、κατὰ καρδίαςを(本稿 3.1.で触れた)ヘロディアノスから引用している！なお、LSJ や Du Cange には **κατάκαρδα** の記述は見られない。

- 29) Κουλάκης (1993: 502) も同じように考えている ("κατάκαρδα, σίνθ.επίρρ. < κατά + καρδιά → κατά-καρδ-α, τροπική κατάληξη")。
- 30) Schwyzer (1950 : 474-5) は現代語に継承された κατά の例として、身体部位名詞と結合した副詞 κατάκαρδα, κατακέφαλα, κατάματα, -μουτρα, -σαρκα を挙げる。
- 31) この二義は 18 世紀初頭の SOMAVERA が明確に記述している ("La testa all'ingiù", "Sù la testa, à traverso la testa")。さらに、現代語にも伝わるが、(i) の意味の方が稀のようである (έπεσε κατακέφαλα. 「まっ逆さまに倒れた」(ΚΡΙΑΡΑΣ II), η πέτρα τον πέτυχε κατακέφαλα. 「石が彼のちょうど頭に命中した」(Ib.))。
- また、前置詞句 κατά κεφαλής もテキストによっては (i), (ii) の両義を示している (Nicephorus Gregoras (AD xiii -xiv) *Byzantinahistoria* 2.864.7 κατά κεφαλής ἐς θάλατταν πίπτοντας (= i), Id. 1.120.3 κατά κεφαλής ἐπάσατο κόνιν (= ii))。
- 32) LSJ "head downwards" Teucer (AD i) *Sphaera* (p. 17), Ib., Supplement, "head over heels", *POxy.* 1853.5 (AD vi / vii)。さらに、Joannes Malalas (AD v-vi) 256.13. ἐμαρτύρησε σταυρωθεὶς κατακέφαλα 「頭を下に十字架に掛けられ殉死した」。
- 33) LSJ II (p.169) of blows "on the head", *PVindob.Salomons* 15.6 (AD v/vi)。さらに、Georgius Monachos (AD ix) *Chronicon breve* 110.1241.49 παρ' ὀλίγον ἤθελε δώσει τὸν βασιλέα κατακέφαλα 「あわや皇帝の頭を打つところであった」。
- 34) κατά + κεφαλής と κατά + καρδίας が対比的に使われている例として Libanius *Declamation* 32.1.39.3 λίθοις βάλλεσθαι κατά τῆς κεφαλῆς... ξίφει κατά τῆς καρδίας 「石で頭を打つか、剣で心臓を打つ」。

引用文献 (【】内は略号)

- Apostolopoulos, Ph. (1984) *La langue du roman byzantin "Callimaque et Chrysorrhoe"*. Athens: Akadimia Athinon.
- Berkowitz, L. & Squitier, K.A. (1990³) *Thesaurus Linguae Graecae Canon of Greek Authors and Works*. Oxford UP.
- Βυζάντιος, Σκ. (1874³/ rpt.1973) *Λεξικόν τῆς καθ' ἡμᾶς ἐλληνικῆς διαλέκτου, μεθρμηνευμένης εἰς τὸ ἀρχαῖον ἐλληνικὸν καὶ τὸ γαλλικόν*. Athens.
- Chantraine, P. (1953) *Grammaire Homérique*. Vol. 2, syntaxe. Paris: Klincksieck.
- Egea, J.M. (1988) *Gramática de la Crónica de Morea, un estudio sobre el griego medieval*. Vitoria / Gasteiz : Instituto de ciencias de la antigüedad, Universidad del País Vasco.
- Glare, P.G.W. & Thompson, A.A. (1996) *Greek-English Lexicon Revised Supplement*. Oxford : Clarendon Press. [LSJ II]

- Hammarström, M. (1925) De κατα- hostili consilio = <contra>. *Eranos* 23, 136–153.
- Hesse, R. (1986) Der Genitiv in den griechischen Präpositionalverbindungen. *Glotta* 64/1-2, 114-25.
- Jannaris, A.N. (1897 / rpt. 1987) *An Historical Greek Grammar*. London.
- Jeffreys, M. J. (1973) Formulas in the *Chronicle of the Morea*. *Dumbarton Oaks Papers* 27, 163-195.
- Κόντος, Κ.Σ. (1892) Φιλολογικά σύμμικτα (ΙΔ΄ Πληγείς εἰς τὸν ὀφθαλμόν. Πληγῆναι εἰς τὸν μηρόν). *Αθηνᾶ* 4, 500–511.
- Κουλάκης, Γ. (1993) *Το μεγάλο ετυμολογικό λεξικό της νεοελληνικῆς γλώσσας*. Athens : Maliaris-Pedia.
- Κριαράς, Ε. (ed.) (1968–) *Λεξικό της μεσαιωνικῆς ελληνικῆς δημώδους γραμματείας (1100-1669)*. Thessaloniki. [ΚΡΙΑΡΑΣ]
- Κριαράς, Ε. (ed.) (1995) *Νέο ελληνικό λεξικό της σύγχρονης Δημοτικῆς γλώσσας*. Athens : Ekdotiki Athinon. [ΚΡΙΑΡΑΣ II]
- Kühner, R. & Gerth, B. (1898 / rpt. 1983) *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*. Vol. II-1. Hannover.
- Lambert, J.A. (1935) *Le roman de Libistros et Rhodamné*. Amsterdam.
- Leech, G. (1974 / 1981²) *Semantics, the Study of Meaning*. Penguin Books.
- Liddell, H.G., Scott, R. & Jones, H.S. (1986⁹) *A Greek-English Lexicon*. Oxford: Clarendon Press. [LSJ]
- Lyons, J. (1977) *Semantics*, vol.2. Cambridge UP.
- Μαυροφρύδης, Α. (1866) *Εκλογή μνημείων της νεωτέρας ελληνικῆς γλώσσας*, Α΄. Athens.
- Mayser, E. (1934 / rpt. 1970) *Grammatik der griechischen Papyri aus der Ptolemäerzeit, mit Einschluss der gleichzeitigen Ostraka und der in Ägypten verfassten Inschriften*. Vol. II-2, Satzlehre. Berlin / Leipzig.
- Mirambel, A. (1983) *Grammaire du grec moderne*. Paris : Klincksieck.
- Schwyzer, E. (1950) *Griechische Grammatik*. Vol. 2. Munich : C.H. Beck.
- Da Somavera, A. (1719) *Θησαυρός της ρωμαϊκῆς και της φραγκικῆς γλώσσας. Tesoro della lingua -greca volgare ed italiana*. Paris. [SOMAVERA]
- Tachibana, T. (1995) The Expressions of the *Interior* in Byzantine Vernacular Greek. 『プロピレア』 7, 63-77.

Κατά καρδίας "against heart" : The Petrification of a Prepositional Phrase

Takashi TACHIBANA

This paper is concerned with the petrification (i.e. frozen idiom) of a prepositional phrase, *κατά καρδίας* "against heart", which is illustrated in the Byzantine vernacular texts of the 12th – 15th centuries.

In the first part, the analysis is performed on the syntactic structure of such phrases as *μέσα / έσω κατά καρδίας*. It is clarified that they consist of the petrified prepositional phrase *κατά καρδίας* and the adverbs *μέσα / έσω* and that they cannot be regarded as typical examples of complex prepositions. As proof of this, four observations are offered :

- (1) the frequency of the examples of *κατά* which co-occurs with adverbs is extremely low
- (2) the syntactic structure of *κατά καρδίας* is hardly expanded by means of modifiers or articles
- (3) the semantic field of *κατά καρδίας* is limited to "striking / hitting / shooting"
- (4) *καρδία* is usually governed by the other prepositions such as *εις*

The second part concentrates on the diachronic process of the petrification of *κατά καρδίας*. It first appears in the second century A.D. Two diachronic factors should be noted as triggers of its formation, i.e. (1) that *κατά* + genitive gradually acquired the meaning "against" and (2) that its semantic field came to be limited to "striking / hitting / shooting". These tendencies can be observed as early as the Hellenistic period and was strengthened during the medieval periods. Therefore, in the late Byzantine period *κατά καρδίας* had reached the last stage of its petrification so that it could not be incorporated into the productive pattern of the complex prepositions.

Some further notes are added concerning the fate of *κατά καρδίας* in the later periods. Modern Greek uses an adverb *κατάκαρδα* which has replaced *κατά καρδίας*. Although this word is not illustrated in the late Byzantine vernacular texts, its presence in Da Somevera's *Tesoro* (1719) suggests that it had been accepted into the vernacular Greek vocabulary at the beginning of the 18th century.